藤女子大学
藤女子短期大学

No. 15

図書館だより

'82. 6

読書とテレビジョン

福　士　敏　雄（食品衛生・加工貯蔵）

未だかつて調査書の趣味欄に，読書とかテレビ鑑賞？などと書いた事はないが，ほどほどに，多分人並に好きな方である。

物珍しさが先に立ち「一億総白痴化」とまで言われたテレビも，今やカラーテレビなしの生活は考えられない程に普及してしまった。テレビは居ながらにして社会の諸問題，また未知の世界に眼を開いてくれるし，とりわけ教育テレビや教養番組の中には是非見ておきたいものも多い。

人格形成の上で読書が不可欠であるという主張は昔も今も変ることはない。何かで読んだのであるが，一日に単行本を平均約三十頁づつ読む人のことをいわゆる読書家という，とあった。どれ程の速度で読むのかは知らないが，何をどれぐらい深く読むかという事も関係してくるだろう。読書の場合は，いく度も読み返したり，いっとき頁を閉じて咀嚼反芻するなど，マイペースで進行する。最近急速に売れ出したホームビデオは，少しでもこのことに近づきたいという願望の所産なのだろうか。あれやこれやと思いめぐらせているうちに，この両者の接点は何か，という事に突き当ってしまった。

私は日頃，主として栄養士課程の学生に接して思うのであるが，そこには聴く（講義），読む（参考図書），見る（実物観察・見学），体験する（実習・実験），そして考える，というプロセスがある。理系科目において講義と書物だけでは，覚える，暗記する努力はするが，なかなか考えるまでには至らない。ところが見学とか実験したあとのレポートを見ると，必ずもう一度詳しく「読む」ことに立ちかえり，的確な考察を加えていることが多い。この効果はビデオテープによっても得られそうである。

そこで一般的な読書とテレビの関連を考える時，テレビの普及によって読書が減ると心配する向きもあるが，ある部分については車の両輪のようにも思えるのである。つまり，読書によって知り得た事柄が，ブラウン管を通して一層確実に消化され，印象づけられる事もあるし，また反対に映像と音から感じとった興味，関心，感動が，さらに書物によって深く知り，学びたい，あるいは原著に触れたい，という読書欲をかき立てる役割を果している。

映画界は斜陽化したと伝えられているが，さて出版界の景気はどのようなものであろうか。

図書館をあなたのものに

―英文学関係の図書―

1. 作家について

シェイクスピアの劇を児童のために散文に書き変えた **Tales from Shakespeare** (1807) と言う作品があります。原文の味わいを出来るだけ失わない範囲で，難しい言葉，会話などは児童が理解できる様に書かれています。当時，一般読者，児童には名前を知られていただけのシェイクスピアの文学が，広く知られる様になりました。著者はチャールズ・ラム (Charles Lamb 1775－1834) とメアリー・ラム (Mary Lamb 1764－1847) の姉弟ですが，当時はチャールズ・ラムの作品として発行されました。

チャールズが悲劇を，メアリーが喜劇を書きました。ラムの一家は，東印度商会の事務員であるチャールズの給料で主に暮していましたが，生活は楽ではありませんでした。暮しの苦労等からメアリーは気が狂い，ある日，母を食卓のナイフで刺し殺したのであります。チャールズは姉の面倒を見ながら，又自分も失恋，家庭の苦労などから精神異常で入院したりしながら一生を独身で過ごしました。メアリーの気分の良いとき，この姉と弟は肩を寄せ合い声をあげてシェイクスピアを読んだと伝えられます。本を読みながら，作者の時代とは？その生活は？と考えると興味は尽きません。作者の生活やその生涯を書いた伝記や，作者と作品の関係についての研究書などが館には多数所蔵されていますが，次の叢書は百数十頁の小冊子ながら見落されないものです。**研究社英米文学評傳叢書**　全100巻（昭8－14)。英文学ではチョーサー，シェイクスピア，ラム，ハーディー，ロレンス等88人，米文学ではホーソン，ドライザー等12人を収録しています。別冊に英米文学史年表，文学要語小辞典等があります。執筆者は市河三喜，福原麟太郎，寿岳文章等です。作家の生涯，作品について要領よく書かれています。約半世紀前の出版ですが現在でも基本図書として評価されており，一昨年，復刻版が出ました。**Writers and Their Work** 29 vols.所蔵（各巻は6－10冊の合冊）(Longmans) は中世から現代までの作家の簡潔な評論で，例えばシェイクスピアは詩，史劇などテーマごとに発行されています。Bible, Short Stories, Maritime Writing 等も含まれています。執筆者は T. S. Eliot, E. M. W. Tillyard, E. Blunden 等です。**英文学ハンドブックー「作家と作品」**70巻として翻訳版が研究社から発行されています。Joyce Cary のような人まで邦訳されていたり，書誌には邦文文献が付記されています。**University of Minnesota Pamphlets on American Writers** 86 vols. 所蔵 Ed. by Leonard Unger and others (Univ. of Minnesota Press) は平易な入門書で，作品の分析を中心としています。翻訳版が北星堂書店から**アメリカ文学作家シリーズ**　9巻として出版されています。

- English Men of Letters 37 vols. 所蔵 Ed. by John Morley (Macmillan)　Johnson, Scott, Gibbonから現代の作家を対象
- Twayne's English Authors Series 約300冊所蔵 (Twayne)
- Twayne's United States Authors Series 約400冊所蔵 (Twayne)

2. 文学の流れについて

姉の事件など失意のラムを慰めたのは，親友コールリッジを始めとする多くの友人でした。ラムとコールリッジの手紙には，2人の友情の厚さがよく表われています。彼はワーズ・ワース，リー・ハント等と文学仲間であり，シェリー，キーツらも同時代の人々でした。小説家ではスコット，オースティン等がいました。ラムに影響を与えたのは，トーマス・ブラウン，ロバート・バートンだと言われています。ある作家が影響を受け，あるいは与えた人々，同時代の人々を知るのも，その作家への理解を増し，作品の味わいを深めますね。

イギリス文学史　斉藤勇著　（研究社）は著者が東京帝大で行った講義（1926－27）を骨子として書き加えた初版の**思潮を中心とする英文学史**（1927）から現在まで，新しい研究を取り入れ改訂増補を続けている日本語による基本的な英文学史です。本書の200頁に余る書誌は，それだけでも参考書として利用できるもので，よく選ばれ実に詳しく，補訂の行き届いたすぐれた作業です。同著者の**アメリカ文学史**もあります。

The Cambridge History of English Literature 15 vols. Ed. by A. W. Ward and A. R. Waller (Cambridge Univ. Press 1907-16) は大規模なイギリス文学史として初めて出版され，文学とその背景など書かれています。1941年に補正，要約し，現代篇を加えて1冊本にしたのが **The Concise Cambridge History of English Literature** Ed. by George Sampson (Cambridge Univ. Press) です。研究社からコンサイスの3版を底本とした**ケンブリッジ版イギリス文学史**　4巻　平井正穂監訳が発行されています。**The Cambridge History of American Literature** 3 vols. Ed. by William Peterfield and others (Macmillan) は **The Cambridge History of English Literature** に対する Supplement として編集されたものです。大部の英文学史には **Oxford History of English Literature** 12 vols. Ed. by F. P. Wilson and Bonamy Dobrée (Oxford Univ. Press) もあります。

The Pelican Guide to English Literature 7 vols. Ed. by Boris Ford (Penguin) はイギリスの一般読者を対象とした Essays で構成されており，1巻目には Anthology of Medieval Texts が載っています。

講座英米文学史　13巻　加納秀夫他編（大修館書店）は通史でなく，各巻が詩，劇，小説などジャンルごとの構成になっているのが特色です。

- Longman Companion to English Literature By Christopher Gille (Longman)　Drama, Poetic Form, Society and Arts 等ジャンル別の構成で，Reference Section として人名，事項の解説あり。
- An Introduction to English Literature By John Mulgan and D. M. Davin (Oxford Univ. Press)
  イギリス文学史　成田成寿訳（八潮出版社）　1940年以後の流れを補遺として加えてある。
- A Short History of English Literature By Ifor Evans (Penguin)
- 英米文学史講座　12巻別巻1　福原麟太郎，西川正身　監修（研究社）　別巻に文学史の方法と題して，文学史の概念，作品研究の方法などが掲載されている。
- 英文学の歴史　大和資雄著（市民文庫　河出書房）
- 物語英文学史　渡部昇一，ピーター・ミルワードの対談（大修館書店）
- The Cycle of American Literature By Robert E. Spiller (Macmillan)
  アメリカ文学の展開　吉武好孝，待鳥又喜共訳（北星堂書店）
- The Literature of the United States By Marcus Cunliffe (Penguin)
  アメリカ文学史　刈田元司訳（北星堂書店）
- Backgrounds of American Literary Thought By Rod W. Horton and Herbert W. Edwards (Appleton-Century-Crofts)
  アメリカ文学思想の背景　関口功，白石佑光共訳（小川出版）
- アメリカ文学の成長　志賀勝著（研究社）

3. 文学の鑑賞について

Essays of Elia（戸川秋骨訳　岩波文庫）はラムの代表作であります。彼は Elia と言う筆名で身辺や心境を語り，それは人間の哀しさと，愚かしさのただようようなユーモアに貫かれています。福原麟太郎は「例えば私はラムのエッセイを英国的エッセイの特徴的なものと考えたいという意見をもっている」と**英文学小論**（吾妻書房）の中で述べています。平田禿木，斉藤勇，福原麟太郎，西脇順三郎，寿岳文章など大先達の著作も読んでみたいですね。英文学に関する研究のほか，読書のことや，文明批評，芸術論，人生観などが含まれており，文学とは何かと言うことを色々な視野から考えさせられます。

- 平田禿木選集　3巻　（南雲堂）　英文学史，エリア随筆，英文学エッセイ
- 斉藤勇著作集　7巻別巻1　（研究社）　文学の世界，イギリス文学史，日本中国文学論集など
- 福原麟太郎著作集　12巻　（研究社）　トマス・グレイ研究，評傳チャールズ・ラム，人生・読書など
- 西脇順三郎詩論集　（思潮社）
- 寿岳文章・しづ著作集　6巻　（春秋社）　書物の共和国，ある夫婦の記録など

多くの作家の作品を集めた Anthology に **The Norton Anthology of English Literature** 2 vols. Ed. by M. H. Abrams and others, **American Literature Survey** 4 vols. Ed. by Milton R. Stern and Seymour L. Gross (Penguin) があります。

イギリス詩文選 (English Poetry and Prose) 斉藤勇編（研究社）は，先に紹介した**イギリス文学史**の姉妹編として編集されたものです。世界文学全集は館にも20種をこす所蔵がありますが，多くの英米の作家が収録されています。集英社の**世界文学全集** 38巻（昭40）はフォースターの **Howards End,** ゴールデングの **Lord of the Flies** 他46編の初訳の作品を含み，**ゴシック叢書**（国書刊行会）や**キリスト教文学の世界**（主婦の友社）などは主題に特色を持たせて，全集のスタイルはそれぞれ異なります。

当然ながら，解説や参考資料が豊富に付いていますし，月報や通信など貴重な文章あり，楽しいものありと個性的です。

4. 関連分野について

作品と時代背景は切り離す事は出来ませんが，ディケンズ（1812−70）は，その時代，つまり資本主義勃興期を背景とした多くの小説を書いています。貧乏人の子として生れた彼は社会の矛盾を，繁栄のかげの悲惨を **Oliver Twist, David Copperfield** 等に，またフランス革命当時のロンドンやパリの都市と民衆の情景を **A Tale of Two Cities** に書いています。次の図書を知っていると便利です。**Illustrated English Social History** 4 vols. By G. M. Trevelyan (Longmans) は14世紀から19世紀までの，さし絵入り社会史で，1巻目は Chaucer's England and the Early Tudors です。文学作品からの引用も多く，歴史と文学を総合した著者の晩年の傑作です。同著者の **History of England** もあり，みすず書房から**イギリス史**　3巻　大野真弓監訳で日本語版が出ています。

英文学の背景　内多毅著　（東海大学出版会）は国民性，宗教，労働者達などについて述べています。

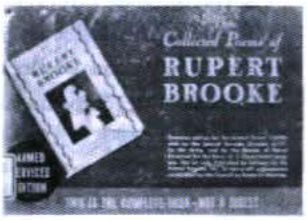
- A Literary Atlas & Gazetteer of the British Isles By Michael Hardwick (David & Charles)
- Dictionary of American History 6 vols. Ed. by James Truslow Adams (Charles Scribner's Sons)

イギリスの海洋文学の歴史は古く，デフォー，スティーヴンスン，コンラッド，メイスフィールドら多くの作家がいます。海と空，船と航海，船乗り気質などを調べるには**海の英語**－イギリス海事用語根源　佐波宣平著　（研究社）は用語の由来，意味などを図入りで説明しています。

グリーンは **The Power and the Glory, The Heart of the Matter, The End of the Affair** 他，カトリックの色彩の濃い小説を書いていますが，グリーンに限らず英文学を読み進んでいくと，作品の主題や，作家の思想にある聖書やキリスト教の把握が無いと深い意味が分らない場合がありますし，ギリシア・ローマ神話も避けて通ることは出来ませんね。

- キリスト教と英文学　ピーター・ミルワード著　別宮貞徳訳（中央出版）
- 文学としての聖書　斉藤勇著（研究社）
- 現代英文学と聖書　野口肇著（学書房）
- 信仰と文学　フィリップ・ストラトフォード著　渡辺洋　小幡光正共訳（白水社）
- ギリシア・ローマ神話　ブルフィンチ作　野上弥生子訳（岩波文庫　岩波書店）
- ギリシア・ローマ古典文学案内　高津春繁　斉藤忍随著（岩波文庫　岩波書店）

5. 文庫について



中学，高校時代には文庫本に親しんだ方も多いでしょう。文庫にも多数の英文学作品が含まれています。中には文庫本でなければ読むことのできない作品や，色々な訳者により各種の文庫に紹介されている作品があります。館には文庫のマンスフィールド短篇集が4種ありますが，編集されている作品も訳者も異なっています。文庫本でも辞典や，研究書があり，解説，書誌，年表など100頁も付いている小説があったり，**ポオ小説全集**（創元推理文庫）にボードレールや江戸川乱歩の解説が見られるなどなかなかのものです。

Penguin Books をはじめイギリスにもアメリカにも数多くの文庫があります。館の蔵書から拾い出して手にとり，見慣れないカヴァーに満足したり，裏表紙の写真に「こんな年寄りだったの」と，みずみずしい情感の作品からは，思いもよらぬ顔を眺めたりします。

6. 辞典について

The Oxford Companion to English Literature Ed. by Sir Paul Harvey (Oxford Univ. Press) は作家，作品，背景等について書かれています。同出版社の **The Oxford Companion to American Literature** Ed. by James D. Hart もあります。

Chambers's Cyclopaedia of English Literature 3 vols. By David Patrick and J. Liddell Geddie (W. & R. Chambers) は，各作家を年代順に配列して，詳しく書いています。

研究社英米文学辞典　斉藤勇編著（昭12）は全6000項目よりなり，また数百頁の膨大な年表は英文学年記と欧州や東洋の一般の動きを対照させています。戦後アメリカ文学を増補しています。なお同著者の**研究社世界文学辞典**もあります。

世界文芸大辞典　7巻　吉江喬松編　（中央公論社）は戦前の出版で新しい内容ではありませんが，文学のみならず，芸術一般や関連事項について大小項目が充実し，学問的な価値を失わぬ面が豊かです。日本最大の文芸辞典として，以後の辞典に影響を与えました。

英米文学植物民俗誌　加藤憲市著（冨山房）は文学作品，伝説，俗信，ことわざ等からの引用，図，写真を用いて，特徴，歴史などを，英語国民の自然観，民族性と関連づけながら説明しております。異名，俗称を多く収録しており，中には O. E. D. にもないものもあります。

- Great Writers of the English Language Ed. by James Vinson & D. L. Kirkpatrick (Macmillan)
- Cyclopaedia of American Literature By Evert A. Duyckinck and George L. Duyckinck (Wm. Rutter)
- A Concordance to Byron's Don Juan Ed. by Charles W. Hagelman, Jr. and Robert J. Barnes (Cornell Univ. Press)
- A Shakespeare Glossary By C. T. Onions (Oxford Univ. Press)
- A Glossary of Literary Terms By M. H. Abrams (Holt, Rinehart and Winston)
- The Oxford Dictionary of Quotations (Oxford Univ. Press)
- The Kenkyusha Dictionary of English Quotations Ed. by S. Ichikawa and others (研究社)
- Catholic Encyclopedia Ed. by Robert C. Broderick (Thomas Nelson)
- カトリック大辞典　5巻　上智大学，ヘルデル書肆編纂（冨山房）

7.　図書のさがし方について

この写真は全部シェイクスピアの本の棚の位置を示しています。図書館では図書を主題ごとにまとめて一ケ所に置いてあります。シェイクスピアの作品も研究書も，多くは932.33の番号を与えられていますが写真の例のように相当はなれた整理をされている場合があります。文学全集に入っている作品，演劇中心の立場で研究された場合などは，932.33と違う場所へ置かれます。著者名・書名目録は主題にかかわりなく，シェイクスピア関係の本が集められており，分類目録は主題で集められています。書架を見ると同時に，目録も利用して下さい。

紙面の都合上，英文学関係の館蔵書の中のごく一部より紹介できませんでした。**Poetry, Renascence, Encounter, T. L. S.** (The Times Literary Supplement) **英語青年，英語研究**などの触れたい多くの雑誌や大学紀要，**American Short Stories, American Novel Series** などの文芸テープ等もありますので，利用して下さい。

☆　☆　☆

※「図書館だより11号」に「英語の学習と図書館」という特集がありますので，参照して下さい。

留　学　記

アメリカの大学で

永　田　淑　子（英文学）

アメリカで2年間生活する機会が与えられた。場所は，子供時代に愛読したトム・ソーヤーとハックルベリ・フィンの冒険物語で有名な，ミシシッピ川をはさんだ両側ということになる。川の東側のイリノイ州の町に住み，そこから川の西側にあるミズーリ州のセントルイスに通う生活であった。

セントルイスの飛行場に着いて，車でミシシッピ川を渡りイリノイに向った時，私の心は子供の頃からの憧れの川であったミシシッピをこの目で見た喜びで躍った。ここで筏に乗って冒険をしてみたいなどという，子供じみた思いも起ってきたのである。

そこでの私の生活は，イエズス会経営のセントルイス大学で学ばせて頂き，幾つかの講義に出ることと，そして大部分の時間を図書館で過ごすことであった。狭い日本の状況に慣れた目には贅沢とも見える，広々とした空間のとり方をした図書館である。（それでももう狭くなってしまったそうで，増築の話が出ていた。）図書館の開館時間は，朝7時45分から夜11時までで，試験期間中には更にそれが延長される。私は，毎朝殆ど開館と同時に図書館に着くような生活で，すぐに館員達と友達になった。彼らの励ましにどれほど力づけられたことか。あの豊かな蔵書と共に，図書館員たちが懐しく思い出される。

この図書館について特記すべきことは，バチカン図書館にある中世・ルネサンスの膨大な筆写本，印刷本が，世界中でただひとつ，ここにマイクロ・フィルムで全部納められていることである。ラテン語を解するならば，どんなに多くの秘められた宝を見出すことであろうと，ひたすら残念に思った。それでも，ヒンヤリとした薄暗いマイクロ・フィルム・リーダー室で長い時間を過ごし，遠い過去の世界の人々の思いと出会うのも，私の喜びのひとつであった。

教員と学生の関係についていえば，専任教員1人につき学生数が13人程度の割合で，その結果相互の関係は極めて密接であり，授業中も両者間の応答が生き生きと活発であり，私には非常に羨ましく思われる一面であった。日本の学生とアメリカの学生との大きな相違点はアメリカの学生達が自己の考えや疑問を卒直に，積極的に授業中に述べることであると，私は感じた。この点は，女子学生であろうと男子学生であろうと違いがない。だから，教授が一方的に1時間述べっ放しということは，あり得ないことなのである。しばしば学生の挙手によって中断されるのがあたり前である。

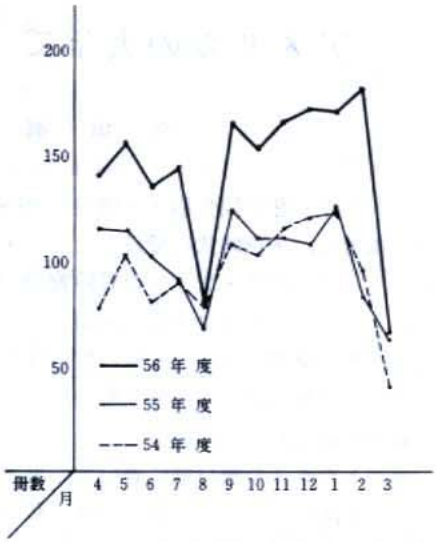
学生たちと教授たちとの密接な関係という点でひとつの例を挙げてみれば，私が出会った教師の中に，新学期が始まって2度目の授業の時に，既に，30人程度の受講生の名前を全部覚えていた先生がいた。2度目というのは，最初の授業の翌々日であった。なかなか学生の名前を覚えられないで申し訳ないと日頃思っている私は，ただただこの先生に感心し，尊敬の念を覚えたのである。又，ある70歳近いイエズス会の神父である教授も，2度目には全部の名前を覚えている方であったが，キャンパスを歩いてい

る時など，度々かつて教えた学生達に，「こんにちは，ファーザー！」と声をかけられる。そこで驚くのは，彼は必ず，「こんにちは，ジョン」とか「おはよう，トム」とか，相手の名前を覚えていて呼ぶことである。

名前は単なる付加物ではなく，その一個の人格に固有のものであり，その人格自身を表わすものであるならば，その名前を大切にするということ，名前を覚えるということは，一人一人の人格を大切にしてゆく教育という場の中で，どんなに重要なことであろうかと，素晴しい模範を見ながら考えさせられたのであった。

このように，人格的触れ合いを大切にして下さる多くの方々との出会いを通して，以前抱いていた否定的イメージも消え，アメリカ人を大好きになって帰ってきたのである。少なくとも私の出会ったすべてのアメリカ人たちを……。

昭和54～56年度貸出冊数推移
（日平均）



※昭和56年度より全接架式となる

資料紹介

岩波美術館　岩波書店

全24冊（歴史館＝12室，テーマ館＝12室）

ボッティチェリの「春」の名画に誘われて，歴史館の扉をあけると，そこにはルネサンスの生き生きとしたいぶきがあふれていた。原始時代から始まり，20世紀の現代美術まで，長い歴史において人のつくり上げた数々の貴重な遺産をここに鑑賞することができる。12の美術の宝庫を訪ねることは，人間の歩んだ歴史の道のりを如実に踏襲する思いに駆られる。

一方，テーマ館も興味深い美術の館である。人，もの，自然など様々のテーマ・モティーフの下に，昔と今，西洋・東洋の区別なく，絵画あるいは彫刻と，幅広い作品に触れることができる。たとえば「踊るひと」のテーマ館では，踊る男女（埴輪），インドのブロンズ像，エジプトの壁画から，ドガやピカソの絵画までを，一度に眺められるのは，画期的な試みといえるだろう。

このように「岩波美術館」には，歴史館，テーマ館と2つの美術館があるのが特徴である。各館には24点の作品が並び，名作として名高い作品だけでなく，普段あまり目に触れられない珍しい作品にも出会えるかもしれない。作品の解説もわかりやすくなっているので，気軽に手にとって鑑賞できそうな気がする。

素晴しい芸術に触れることは，大きな楽しみである。現在ではまだ5冊しかない書架が，月1冊づつ順に，新しい世界や夢を与えてくれる美術館でいっぱいになることを心待ちにしていたい。

〔歴史館〕第9室ルネサンス

本と私と

本との出会い

鈴木智子（国語学）

私の手もとに三冊の読書録がある。学生時代からつけ始めて，今はちょうど三冊目のなかばほど。書き始めてからもう三十年もたつというのに，その間に読んだ本のメモが，あまり厚くもないノート三冊を埋め尽くしていないということは，自分の読書量がいかに少ないかを語っていることで恥ずかしい。にもかかわらず，私はこのノートを大切なものに思っている。

いったい私は子供の時分からあまり本を読まなかったらしいが，国文科の学生になってもなおかつそんなふうであったから，見かねた兄に「読書録をつけてごらん」とすすめられた。ノートを一冊きめて，読み始めと読み終わりの日，著者，書名，発行所，それに一言でいいから感じたことを書けばよいのだと言う。私の方は，ちょうど父から入学祝いに贈られた万年筆が嬉しくて，これで何か書いてみたいと思っていた矢先であったから，そんな気持の方が先立って，持ち合わせのノートの中から一番上等なのを一冊選び出し，さっそく読書録をつけ始めた。

今見ればほんとうに粗末なノートの，赤茶けた一ページ目を開いてみると，戦没学徒の手記『きけわだつみの声』の抜書きで始まっている。

> マニラ湾の夕焼は見事なものです。こうしてぼんやりと黄昏時の海を眺めていますと，如何して我々はにくしみ合い，矛を交えなくてはならないかと，そぞろ懐疑的な気持になります。避け得られぬ宿命であったにせよ，もっと外に打開の道はなかったものかと，くれぐれも考えさせられます。

戦時中はまだ子供であったけれど，子供心にも何度同じように思ったことだろう。戦争が終わり，自分が出陣していった学徒と同じ年ごろになった時この本を手にして，死んでいった多くの若者の心を思い，なんとも切ない気持で読み終わったのを思い出す。

一冊目のノートの前半分には太平洋戦争の本ばかりが並び，後半分には宗教書からのメモが続いている。読み返してみると，どのページもそのまま青春の時代を映し，心の歩みをとどめている。

二冊目のノートの頃は，手あたり次第に何でも読んでいたらしく，美術，伝記，童話，歴史，宗教，音楽など，様々な本がめちゃめちゃに並んでいる。三冊目もほぼ同様であるが，日本文学が少し多くなり，時に同じ作家の作品が続けて読まれているのが違いと言えようか。それぞれの書名の下には，感動した言葉や，特別記憶にとどめたかった部分などが抜き書きされている。書くことによって，読んだものは整理され，だまって読み過ぎればそのまま消え去ったであろう感動も心に深く刻みこまれることになった。全体から見れば自分の感想よりも抜き書きの方が多いのだが，それらを追って行くと，その時その時に自分が何を求めていたのか，ここにもはっきりたどることができる。

読書録のつけはじめは，私にとってはペン習字のようなものであったのだが，書き読けているうちに本を読むことが楽しくて仕方がなくなった。しなければならない仕事をしに立つためには，よほど決心をして自分に言いきかせなければ容易に本のそばを離れたくない。けれどもこんなに読書が好きになった時は生活の中に読書の時間をほとんどとれなくなった時で，読書時間に恵まれていた学生時代にあまり読まなかったことが悔やまれてならない。

しかし，過去にあまり読んでいないということは，これから先に読むべきものがたくさん残

っているということでもあり，考えようによっては大変に心楽しい。もう余生いくばくも無かろうから，どうせ限られた時間に読むのであれば，優れた作品を読みたい。それを生み出した作家についても知りたい。どのような時代に生き，どのような環境の中で，どのように自分の道をふみ固めて生きたのか，偉大な精神のたどった道筋を私もたどり，その広く深い世界にはいりこんでみたい。そして，それらの一つ一つを大切にまた私の読書録に記して行きたい。

パリの本屋さんたち

橋　本　征　子（フランス語）

パリの本屋の多くは，五区六区のカルチェ・ラタンに集中している。ソルボンヌ大学（文学部・法学部）に面しているサン・ミッシェル通りには文学関係・法学関係の本屋，パリ大学の医学部に面しているサンジェルマン・デ・プレ通りには医学関係の本屋が集っているので，この界隈を歩けば学生は大抵の目的の本が手に入るようになっている。

私も留学の始めの頃は，地図に印をつけて本屋一軒一軒を歩いていたが，二人の本屋さんと親しくなってからは余りそういうこともなくなった。予め帰国の日を知らせておくと，彼等がその日迄に必ず「遠い日本の女友達」のために本を揃えておいてくれるからである。

そのひとり，リュクサンブール公園の並びにあるオウトルマン・デ書店の主人，ミッシェル。彼は若手の詩人で，透明感のある豊穣なイメージを駆使しながら鋭い文明批評の詩を書く。この書店は，彼の詩人仲間の友人達もよく立ち寄り，ちょっとした文学サロンにもなっていて，ここに行くと最近の文学の動向をよくつかめるし，彼や彼の友人達も私の研究テーマを熟知していて，「あんな本がある，こんな本も出た」と適切にアドバイスをしてくれるので私は大助かりである。

だが，私が何よりも好きなのは，ミッシェルが静かに語ってくれる彼の故郷カルナックの話である。ブルターニュ生れの彼は，自分のことをフランス人とは思っていないようだ。（この地方は，歴史的に孤立した，近代化の立ち遅れた地方で，現在でもなお，この地方独特のブルトル語が話され，フランスからの独立運動が行われている。）彼は，瞳を輝かせながら故郷の小径に沿ってえんえんと置かれた石の謎を語る。彼によれば，数キロの道に沿って小さい石から次第に大きくなる石が何かを示すように並んでおり，その終りのところには秘儀に使われる丸い大きな柱がうめられているというのである。先史時代，カルナックには海の神様が沢山住んでおり，これらの石は神様の忘れ物で，この石にそおっと耳をつけると波の声，海の言葉が聞えてくる。彼にとってこの石から聞えてくる言葉が，本当の言葉，原罪によって汚されていない言葉，つまり詩の言葉だということだ。そんなことを話すとき，彼のエメラルド色の瞳は，すいこまれるような深い海の色となり，パリの真ん中にいながら，彼の周囲に海があるような静けさと落ちつきを覚えるから不思議である。

もう一人の友人の本屋さんは，セーヌ川沿いのブッキニスト（古本屋）のジョルジュじいさんである。彼は男やもめの七十四歳。息子は第二次大戦のレジスタンス派の勇士，じいさんの本屋のすぐ横のポン・ヌフ橋で撃たれて死んだということだ。じいさんは七月十四日のパリ祭にこの橋のたもとに白い百合の花束を欠かしたことがない。彼は雨の日も風の日も今にも壊れそうな屋台で観光客むけのセピア色の古いパリの写真や，少し猥せつな本などを売っている。一人暮しの淋しさも手伝うのか，彼はいつも傍に葡萄酒壜をおいて店番をしている。それを飲み干した後は，近所のビストロに入ったきり，店も開店休業になることが度々だ。私は，頼ん

だ本（彼は必ずみつけてくれる！）を取りにきて，店番用の小さな椅子に座って，待つこと三時間ということもある。流れゆくセーヌの微かな水の音に混じって，ノートルダムの鐘の音が聞こえてくる。半世紀以上も長い間，じいさんはここで何を見てきたのだろう，占領下のパリで小さいながら本屋を続けるのはどんなに大変だったろうと，彼の過した時間の重みを計りながら，ヨーロッパの歴史を思ってみる。そして，こんな遠い国の文学をしようとしている自分は一体何なのか，精神構造も風土も違うこの国の文学を私はどこまでわかるのだろうか，と反芻してみる。じいさんは私の帰国が近づくと「必ずまたくるんだよ」と何度も堅く手を握る。この手の温もりが私とフランスを結びつけているものかもしれないとふと思う。

この二人のお蔭で，私は殆ど本探しに困ったことはない。だが，洋書となると読むのが遅くて，今，私の本棚には，〝読んでもらいたがている本〟がびっしりとつまっている。

ぶらうじんぐるーむ

わたしの図書館利用

鈴木裕子（昭和56年度国文学科卒）

チャペルの鐘が鳴り，図書館の明かりが消えると，私の窓は夕暮れる――そんな距離に住んでいたため，私の大学生活とはまさにキャンパス空間で過したようなものでした。

学生の殆どは，試験やレポートのために図書館を利用しているようですが，私も例外ではありません。使う本の種類も，主に国文学関係の雑誌・紀要，単行本などに限られていたと言ってよいほどです。入学したての頃はそれらの探し方がわからず，雑誌の論文など合冊された本の背表紙のタイトルからひとつひとつ必要なものをみてゆくという，今から思えば随分非合理的な検索の方法をとっていました。ガイダンスや，司書の方に教えてもらったりなどして，ようやく図書館の有効な使い方が出来るようになったのもごく最近なのです。書誌の見方，目録カードの利用などは覚えて使いこなせるようになれば大変役に立ちます。一冊の本から次々に必要なものがみつかってゆく喜びは大きいものです。

手当り次第に読んでゆくという乱読的な方法は趣味の範囲では良いのでしょうが，学問を志す者にとって，やはり系統的なものが要求されます。幸い，我大学は全ての図書が開架ですから，自分の目で，足で必要とする本の位置を知り手に取って確めることができます。又，セルフサービスですぐコピーすることもできます。それらは私が在学中に改善された2点ですが，これからは更に合理性が要求される時代ですので，どんどん図書館も変わってゆくことでしょう。そのためにも，利用者がもっと使いこなしてゆかなければなりません。

4年目に入ってからは，卒論などのためにいろいろな資料を見る機会も多くなりましたし，読書の幅も広がりました。しかし，ここの蔵書の数多くは，私にとってまだまだ眠ったままです。「大学の心臓」あるいは「知識の宝庫」といわれる図書館を大いに活用し自分のものとして，学生生活の充実を図られることを，後輩の皆さんへ願って止みません。

生きるということ

中川志津恵（家政科2年）

図書館の司書の方から原稿を依頼されたとき咄嗟に断わろうと思ったのだが，一度社会に出た経験のある私は，「学生生活の思い出に……」という一言に心を動かされて，軽い気持で引き受けてしまった。

「一生を終えてのちに残るのは，われわれが集めたものではなくて，われわれが与えたものである」という言葉を聞いたとき，はたして自分には何が残るのか，何を与えられるのかと考

えたのであった。

生きる意義あるいは目的をつかめない状態で虚無的な生活を繰り返し，人生とは，誰にとってもつまらなくて退屈なものなのかと悩んだ。自分自身が風化されそうに感じた時期もあった。生きるのなら，一つの理想に向って，まっしぐらに生きたいと願い，そうなるのもならないのも，自分次第であるのは百も承知であった。

先日読み終えた三浦綾子の『ひつじが丘』に愛についての印象深い箇所があったので書いておきたい。

「人間同士というものは，憎み合いお互いをうらぎるように生れついている。人間は過ちを犯さずには生きていけない。愛するとはゆるすことである。人は他人に幾度もゆるしてもらわねばならない存在なのである」

私は日頃，この世の中にはパーフェクト（完璧）な人間は存在しないと思っている。そのような人間は神様であるとずっと信じている。神様といっても具体的にはわからないが……。

ともすれば流されそうな自分を冷静に見つめ目的を持って生きていきたいというのが今の私の願望である。残り少ない学生時代を〝充実〟の二字におきかえる努力が必要である。

NEWS.....

資料の移動

資料が増加して，閲覧室・書庫にスペースがなくなってきたため，春休み中に作業を行い，配置を変更しました。館内のあちこちに配置図が置かれています。なお洋書の一部が館外資料室へ別置されました。利用の際は係員にお申し出下さい。

新規継続雑誌紹介

下記の雑誌が継続購入されることになりました。

- 別冊中央公論
- 発達
- 海燕
- こどもとしょかん
- Linguistic Inquiry
- 御心の使徒
- 龍門
- サイコロジー
- 思想の科学（第7次）

寄贈図書紹介

昭和56年度文学部国文学科，英文学科，並びに短大国文科卒業生から，下記の図書が寄贈されました。

- 勉誠社文庫　第1・4期　39冊
- ケンブリッジ版イギリス文学史　全4巻　研究社
- アメリカ文学史　研究社
- 日本近代文学大事典　全6巻　講談社
- 近代作家の性格論　明治書院

夏休み中の予定

例年どおり7月16日から8月31日まで休日開館となり，期間中に蔵書点検作業などのため，休館があります。詳しくは掲示板でお知らせします。

（休日開館　午前9時30分－午後4時00分）

編集後記

緑は色あざやかに，草花も咲き，北海道の一番よい季節に「図書館だより　15号」を発行することができました。慣れない編集委員で四苦八苦の毎日でした。

新入生は新しい生活に少し慣れたころでしょうか。この「図書館だより」が皆さんのお役に立てたら幸いです。これからも魅力ある館報をつくるよう，次の号に向けて，新しいスタート！

藤女子大学 藤女子短期大学　図書館だより　第15号　1982. 6. 1. 発行
発行者　札幌市北区北16条西2丁目　藤女子大学図書館
印刷者　札幌市東区伏古8条2丁目　天使院印刷製本部